

## 14 大学図書館に期待するもの

著者	寺門 臨太郎
内容記述	研修：令和元年度大学図書館職員長期研修 主催：筑波大学 期間：令和元年7月1日～7月12日 会場：筑波大学春日エリア情報メディアユニオン2階メディアホール等
発行年	2019-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00157203">http://hdl.handle.net/2241/00157203</a>

## 大学図書館に期待するもの

寺門 臨太郎

筑波大学 芸術系 准教授

[西洋美術史／ミュージアム・スタディーズ]

### ●講義の趣旨

講師の専門分野である美術史（学）Art History は、「美術」あるいは「芸術」を対象に据えて実証的な考察を加え、それぞれの対象を時間軸のうゑに位置づけて美術の歴史 History of Art というストーリーに組みなおすことを目的とするものであり、またその手段でもある。人が人の手により人自身のために意識的に作りだした「かたちあるもの」の一部を、人は「美術（品）」と呼び、美的鑑賞の対象にしている。往時なんらかの目的と機能によって作られた「もの」は、鑑賞対象となるや元来の機能から解放される一方、近代的制度としての「美術」の枠組みに押しこめられ、鑑賞という行為の具となることに甘んじ、本来の至高性ないし主体性を喪失しているようにみえる。また、そのとき美術史研究者は研究の名の下に「もの」の至高性ないし主体性を無意識のうちに忽せにしていることがある。この講義では、元美術館学芸員である美術史研究者の講師が、電子ジャーナルの普及による先行研究へのアクセス手法や量と質における著しい変化を視野にいれながら、美術史研究の方法と実践、さらに大学所蔵のアート・コレクション管理の業務と MLA 連繫議論も絡め、「もの」としての書籍の至高性ないし主体性を再問しようとする。

### ●講義の構成

1. 美術史（学） Art History と美術の歴史 History of Art の方法
  - (1) 「美術」という制度と「作品」
  - (2) 「傑作」への投資
  - (3) 「もの」としての美術作品の至高性、あるいは「もの」が主張する主体性
  - (4) 米国ウィリアムズ・カレッジの教育研究環境
2. 美術史研究者がつくられる環境
  - (1) ふたつの美術史
    - ・大学での美術史の研究と美術館での美術史の実践
  - (2) 愛知芸術文化センター
    - ・愛知県美術館
    - ・愛知県文化情報センター・アトライブラリー
3. 大学図書館に期待するもの
  - (1) 知のショールームとしての大学ミュージアム
  - (2) オーソライズされたミュージアム組織をもたない大学の知
  - (3) (机上の) MLA 連携議論